

生活科教育法における教育実践力を高める大学たんけん支援

永田 成文*

Students Support for the Region Exploration of University Site to Enhance Practical Educational Abilities in Teaching Methods of Living Environment Studies

Shigefumi NAGATA

要 旨

本研究では、大学の生活科の教科教育法において、小学校の生活科学習に位置づけられている大学たんけんを支援する活動を取り入れた授業を行い、受講生の教育実践力が高まったのかについてアンケートやワークシート記述から分析し、その有効性を検討することを目的としている。受講生のアンケートの結果から、たんけん学習の知識、生活科と低学年社会科の知識、教育現場で児童と積極的に交流する意欲が高まることや、ワークシートの結果から生活科を学ぶ意欲、生活科の授業実践力を身に付ける意欲も高まることが明らかになった。また、児童は大学生との交流による大学たんけんにより大学に興味・関心や親しみをもつことができた。

大学たんけん支援を核とした生活科教育法の授業は、受講生の生活科のたんけん学習の理解を深め、生活科を学ぶ意欲や教育実践力を高めることができ、大学たんけん支援の活動の導入は有効性があるといえる。また、児童の町たんけんの興味・関心や親しみをもつ活動にもなっているため、生活科の内容(3)「地域と生活」のねらいにそっている。より受講生の教育実践力を高めるために、たんけん支援以後の児童の気付きの質を高めるための小学校と連携した授業を位置づける必要がある。

キーワード：たんけん、生活科、教育実践力、大学、親しみ

1. 生活科におけるたんけん学習の課題

平成元年版小学校学習指導要領において、低学年社会科と理科が廃止され、生活科が新設された。生活科は、低学年における児童の具体的かつ総合的な活動を通じた合科的指導の必要性から、「生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」ことが究極目的として示された。平成29年版学習指導要領では文言が若干異なって示されたが、生活科の趣旨は一貫して変わっていない。

生活科の基本的視点として、「自分と人々や社会とのかかわり」、「自分と自然とのかかわり」、「自分自身」の3つが示され、それぞれ社会科の内容、理科の内容、自己の成長の内容と関連している。第1表は生活科教科書の項目の変遷を示したものである。平成元年版学習指導要領に対応した教科書では、それまでの低学年社会科における「気付かせる」という目標による社会認識の芽を育てる買物、乗物、郵便の単元が、「できるようになる」という目標による新たな単元が位置づけられた。平成10年版に対応した教科書では、

買物の内容が消え、乗物と郵便は他の単元の一部に吸収され、まちあるきの単元が登場した。平成20年版に対応した教科書では、乗物や郵便の内容も消え、代わりにたんけんの単元が位置づけられた。一見すると「自分と人々や社会とのかかわり」より「自分と自然とのかかわり」の内容が増えているが、地域の中で児童が生活できる力を重視する内容に変化している。

「自分と人々や社会とのかかわり」の内容は、地域の働いている人々や特徴的な場所をとりあげることによって重点をおくたんけん学習で実施することになる。野田ほか(2005)の生活科で育った学力についての調査では、心に残る生活科の活動において、「自分と自然とのかかわり」に比べて「自分と人々や社会とのかかわり」の項目は低調で、探検の中でも学校探検と学校周辺の探検に比べて町探検は低調であること、生活科で身に付いたと思う力については、町探検にかかわる町の人・もの・ことに関心をもつことが一番低調であったことが示された。この調査を継続した野田ほか(2015)の調査においても同様の傾向が見られ、町探検が児童の心に残るような手立てが必要である。

第1表 生活科教科書の項目の変遷

	平成3年生活科	平成12年生活科	平成23年生活科
一年生	<p>1. うれしいな1ねんせい</p> <p>①みんなともだちになろう</p> <p>②がっこうをたんけんしよう</p> <p>③がっこうにくるみちをしらべよう</p> <p>2. いきものとなかよし</p> <p>①どんなはなをさかせようか</p> <p>②はなのたねをまこう</p> <p>③どうぶつともだちになろう</p> <p>3. ちかくのあそびば</p> <p>①あそびばをしょうかいしよう</p> <p>②こうえんへあそびにいこう</p> <p>③いきものようすをみてみよう</p> <p>④はながさいたよ</p> <p>4. たのしいあそび</p> <p>①すなやつちとあそぼう</p> <p>②みずやかぜとあそぼう</p> <p>☆なつやすみをたのしくしよう</p> <p>5. みつけたよあき</p> <p>①はなのたねをとろう</p> <p>②がっこうのまわりであきを見つけよう</p> <p>③こうえんのあきをさがそう</p> <p>④きのはやきのみであそぼう</p> <p>6. わたしのかぞく</p> <p>①うれしかったことをおもいだそう</p> <p>②かぞくの1にちをしょうかいしよう</p> <p>③じぶんのしごとをさがそう</p> <p>☆ふゆやすみにしたいことをかたるにしよう</p> <p>7. ふゆをたのしく</p> <p>①おしょうがつのことをはなそう</p> <p>②さむさにまけないあそびをしよう</p> <p>③こうえんでふゆを見つけよう</p> <p>8. もうすぐ2ねんせい</p> <p>①1ねんかんをおもいだそう</p> <p>②おたのしみかいをしよう</p> <p>③1ねんせいをむかえるじゅんぴをしよう</p> <p>☆2ねんせいになったら</p>	<p>1. うれしいな1ねんせい</p> <p>①おはよう</p> <p>②なかよくしようね</p> <p>③よろしくね</p> <p>2. とびだせんけんたい</p> <p>①がっこうをたんけんしよう</p> <p>②がっこうのまわりをあるこう</p> <p>③こうえんであそぼう</p> <p>④こんなところもあるよ</p> <p>3. いきものだいすき</p> <p>①はないっばいになあれ</p> <p>②めがでた!</p> <p>③ぐんぐんのびろ</p> <p>④どうぶつとなかよしになろう</p> <p>4. なつをげんきに</p> <p>①はながさいたよ</p> <p>②すなやみずであそぼう</p> <p>③たのしいなつやすみ</p> <p>④おもいでたくさんできたよ</p> <p>⑤たねをあつめよう</p> <p>5. みんなだいすき</p> <p>①わたしのできること</p> <p>②わたしのできること</p> <p>③あきがいっぱい</p> <p>④がっこうのあきをさがそう</p> <p>⑤いろいろなあきを見つけよう</p> <p>⑥きのはやきのみであそぼう</p> <p>⑦はるにさくはなをそだてよう</p> <p>7. ふゆをたのしく</p> <p>①さむさにまけるな</p> <p>②ふゆをさがそう</p> <p>③ふゆやすみをたのしく</p> <p>④たのしかったふゆやすみ</p> <p>⑤みんなであそぼう</p> <p>8. わたしの1ねんかん</p> <p>①おもいでがいっぱい</p> <p>②みんなチャンピオン</p> <p>③おもいでをあつめよう</p> <p>④あたらしい1ねんせいがくるよ</p>	<p>1. がっこうだいすきともだちだいすき</p> <p>—わたしのがっこう</p> <p>①どきどきわくわくいちねんせい/がっこうはたのしいよ</p> <p>②なかよくなるうね/みんなであそぼう</p> <p>③えがおがあつちにもこつちにも/きいてきいて</p> <p>〔さあしゅつぼつがっこうたんけん〕</p> <p>④どこへいこうかな/だれにあえるかな</p> <p>⑤みつけたよきいたよ/ここがわたしのおきにいり</p> <p>⑥わたしもおてつだいおもいでしてみよう</p> <p>2. はながうたうよるんららん</p> <p>—わたしのはなをさかせたい</p> <p>①なにをそだてようかな/あんなたねこんなたねふしぎなたね</p> <p>②めがでたはがでたせがのびた</p> <p>③げんきにそだつてね/さいたさいた</p> <p>④ひとつぶのたねからこんなにたくさん</p> <p>⑤またそだてないな</p> <p>3. いちにしんぼでさんさんおひさま</p> <p>—わたしとさんぼ：はるからなつへ</p> <p>①おひさまといっしょにさんぼ/わくわくさんぼさあしゅつぼつ</p> <p>②あつちからこつちから/おひさままきらきらみどりまきらきら</p> <p>③にじいろのアルバム/わくわくなつさがし</p> <p>④なつやすみだいさくせん/いまなつまつさかり</p> <p>4. くさきもわたしもころもかえ</p> <p>—わたしとさんぼ：あき</p> <p>①わくわくあきさがし/おひさまキラキラおちばもキラキラ</p> <p>②こがねいろのアルバム/こんなにあつたよみんなのあき</p> <p>③あつまれあつまれあそびのひろばへ</p> <p>5. しろいききははきながら</p> <p>—わたしとさんぼ：ふゆ</p> <p>①わくわくふゆさがし/おひさまキラキラかぜとキラキラ</p> <p>②きたかぜのアルバム/ワイふゆやすみだ</p> <p>③さんぼのおもいでいろいろ</p> <p>6. ともだちいっぱいおもいでいっぱい</p> <p>—わたしのいちねんかん</p> <p>①おもいでいっぱい/はるなつあきふゆじぶんみつけ</p> <p>②じぶんにはくしゅしたいこと</p> <p>[もうすぐはるがきたら2年生]</p> <p>③おひさまキラキラいっしょキラキラ</p> <p>④まっているよあたらしい1年生</p>
	二年生	<p>1. わたしたちのすんでいるところ</p> <p>①きんじょのようすをしらべよう</p> <p>②いろいろなおみせを見てみよう</p> <p>③かいものごっこをしよう</p> <p>2. 生きもののおせわ</p> <p>①サツマイモのなえをうえよう</p> <p>②いろいろなやさいをつくろう</p> <p>③ザリガニやチャボをかおう</p> <p>④ザリガニだよりをつくろう</p> <p>3. 夏をげんきに</p> <p>①雨の日をたのしくすごそう</p> <p>②夏の虫を見つけよう</p> <p>☆わたしたちの夏まつりをしよう</p> <p>4. みんなのりもの</p> <p>①のりものにのったことをはなそう</p> <p>②えきのようすを見にいこう</p> <p>③バスにのってみよう</p> <p>5. うれしいやさいのとりのりれ</p> <p>①サツマイモを見てみよう</p> <p>②はたけや草木のようすを見にいこう</p> <p>③秋のとりのりれをわおう</p> <p>6. わたしたちのゆうびんきよく</p> <p>①てがみをだそう</p> <p>②がっきゆうゆうびんきよくをひらこう</p> <p>☆カレンダーをつくらう</p> <p>7. たのしいおもちゃたいかい</p> <p>①うごくおもちゃや音の出るおもちゃをつくらう</p> <p>②おもちゃたいかいをひらこう</p> <p>8. 冬のくらし</p> <p>①冬をさがそう</p> <p>②冬の生きものようすをしらべよう</p> <p>9. 大きくなったわたしたち</p> <p>①大きくなったことをたしかめよう</p> <p>②アルバムづくりをしよう</p> <p>☆3年生になったら</p>	<p>1. 2年生になったよ</p> <p>①1年生をむかえよう</p> <p>2. はるのまちにでかけよう</p> <p>①みんなのまちをあるいてみよう</p> <p>②であつたよみつけたよ</p> <p>③みつけたことをしょうかいしよう</p> <p>3. 生きものがいっぱい</p> <p>①やさいをそだててみよう</p> <p>②おいしいやさいをつくろう</p> <p>③みつけたよ!</p> <p>④生きものともだち</p> <p>⑤早く大きくなあれ</p> <p>⑥わあいできたよ</p> <p>⑦雨の日にみつけたよ</p> <p>4. なつがきた</p> <p>①なつの生きものをさがそう</p> <p>②なつの生きもの大はっけん</p> <p>③おもいでいっぱい</p> <p>5. おもちゃのくに</p> <p>①なにをつくらうかな</p> <p>②おもちゃをつくらう</p> <p>③おもちゃであそぼう</p> <p>6. あきみつけ</p> <p>①のりものにのって出かけよう</p> <p>②でん重にのろう</p> <p>③のやまのようすをみにいこう</p> <p>④あきがいっぱい</p> <p>⑤あきのとり入れをしよう</p> <p>⑥おまつりのじゅんぴをしよう</p> <p>⑦さあ、おまつりだ!</p> <p>7. ふゆがやってきた</p> <p>①ねんがじようを出そう</p> <p>②もうすぐふゆやすみ</p> <p>③ふゆをげんきに</p> <p>④ふゆさがしに出かけよう</p> <p>8. すくすくそだつたね</p> <p>①生まれたころとくらべよう</p> <p>②小さいときのことをきいてみよう</p> <p>③わたしのものがたりをつくらう</p>

波下線は社会科の買物・乗物・郵便、枠はたんけんにかかわる項目。日本文教出版(旧大阪書籍)の教科書より作成

野田ほか(2015, p.38)は、「生活科や総合的学習の授業は、教師のコーディネート力が要求され、教師力を高める意味でも重要な『町探検』の在り方を今一度見直し、充実させる必要がある」としている。

筆者が担当する生活科の教科教育法である生活教材研究C¹⁾では、受講生による三重大学のたんけん支援を津市立北立誠小学校の第2学年の生活科のたんけん学習の一環として行っている²⁾。

本研究では、教材を作成し、系統的な発問を考えるような授業設計力と授業の中で児童・生徒と対話し、様々な授業展開に適宜対応し、時間配分を考えて一つの方向性にまとめる授業運営力から構成される実践的指導力とそれらを自分から積極的に高めていく態度と能力を含めて教育実践力と考えたい³⁾。本研究は、生活科教育法において教育現場とのかかわりによる大学たんけん支援を核とした授業について、受講生の教育実践力の育成という視点からその有効性を検証することを目的としている。

研究の方法として、生活教材研究Cにおいて受講生の大学たんけん支援を核とした授業を実施し、受講生のアンケートやワークシートの記述により教育実践力が育成されたのかについて分析する。また、実際に生活科のたんけんのねらいが達成できたのかについて児童のアンケートにより分析する。これらをもとに大学たんけん支援を核とした授業の評価を行う。

2. 生活科教育法における大学たんけん支援

2.1 大学たんけん支援を核とした授業

大学たんけんは生活科の内容(3)「地域と生活」に該当し、「自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみをもち、人々と適切に接することや安全に生活できる」ことが目指されている。佐藤(2018, p.86)は、「児童の生活の場の広がりや背景に、地域に出かけることで、さまざまな人々や場所との出会いを作り、それらに心を寄せ、自分の生活とのかかわりをさらに広げたり深めたり高めたりすることが期待できる」としている。大学たんけん支援では、大学が身近な地域に存在する高等教育や公共サービスを行っている場所であり、支援する受講生とともに大学で勉強する大学生や働く職員が出会う人々となる。

2015年の生活教材研究Cで、筆者が担当している3回分の授業の概要を示したものが第2表である。第1回は、社会科の第3学年のたんけん学習と第2学年の生活科のたんけん学習について、平成20年版の小学校学習指導要領解説と教科書記述を比較させ、社会科は地域の様子は場所によって違うことを捉えるためにたんけんして白地図などにまとめること、生活科は

自分たちの生活が地域とかかわっていることに気付くためにたんけんしてカードなどにまとめることを確認した。次に、体験が入っていること、大学にいる人々と接する機会をもつこと、大学が親しみのもてる場所となること、雨天も想定するという4点を確認し、班ごとに大学たんけん支援計画を立てさせた⁴⁾。児童の興味・関心や歩く速さを勘察し、1つの場所で十分な時間を確保するようにアドバイスした⁵⁾。その後、計画したルートの下見をさせた。

第2回は、7班分の計画を印刷して配布し、自班のよいところ、他班の計画で見習いたいところを考えさせた。その後、北立誠小学校の児童と合流し、大学生と児童の混合チームで自己紹介し、大学たんけんを行った。受講生は児童とコミュニケーションを多くとるように意識し、児童の発見につながる声かけをしたり、大学で働く人へのインタビューを促したりした。大学たんけん支援後、児童への対応などで気をつけていた点や、生活科としてのたんけんの進め方で大切な点などを振り返らせた。

第3回は、生活科の変遷(第1表参照)を読み取り、買物や郵便や乗物などの社会認識の芽を育てる「自分と人々や社会とのかかわり」の単元が徐々になくなり、町たんけんが唯一残っていることから、大学たんけん支援を行った意味を考えさせた。次に、低学年社会科と生活科の郵便と乗物の単元の教科書を比較させた⁶⁾。どちらもごっこや見学という体験活動はあるが、前者は社会のしくみに気付く、後者は地域社会で生活することできることが目指されていることを確認し、それぞれの教科の学習のよさを考えさせた。

第2表 大学たんけん支援を核とした授業の概要

第1回	2015年6月3日(水)
○学習指導要領と教科書を比べ、第2学年生活科と第3学年社会科の校区たんけんの違いを考える。	
○班で大学たんけん支援計画を立てる。	
○班で実際に計画ルートを下見し、改めて三重大学で発見したところを確認する。	
第2回	2015年6月10日(水)
○7つの班の大学たんけん支援計画を比較し、それぞれのよさを考える。	
○班の大学たんけん支援計画にそって、北立誠小学校第2学年の児童と一緒にたんけんする。	
○大学たんけん支援で気をつけていたことや生活科のたんけんで大切な点を考える。	
第3回	2015年6月17日(水)
○生活科の変遷を確認し、生活科のたんけんが社会科の社会認識の流れをくむことをつかむ。	
○低学年社会科と生活科の目標と郵便・乗物の単元を比較し、それぞれの良い点を考える。	

2. 2 大学たんけん支援計画と実施

神永(2018, p. 12)は、生活科実践の充実と発展に向けて継承すべき点の1つに「子どもから引き出す」構えをもつことを挙げ、「生活科の学習では、教師から学習のめあてや方法を与えるのではなく、子どもの『気付き』の表出を促し、『思いや願い』を大切に、次はどのようにしていくかを子どもとの対話を通して、子どもたち自身が自己決定していけるようにしていくことが目指されている」としている。

生活教材研究Cの受講生は班ごとに児童の視点からさまざまな発見ができる大学内での訪問先を検討した。第1図は、7つの班が取り上げた主なたんけんポイントを地図で示している。50分の時間内で効率よく回ることができ、児童の興味・関心を喚起するような大学独自の場所を選定していることがわかる。

7つの班の計画を具体的に示したものが第3表である。1班は小学校との違いを意識し、畜舎→環境・情報科学館(メープル)→教育学部棟→食堂を探検した。2班は大学生の生活を意識し、教育学部棟→食堂・翠陵店→畜舎と三翠ホールとグラウンドはやめて図書館や第一体育館を加えて探検した。3班はどんなどころで勉強しているかを意識し、教育学部棟→環境・情報科学館と食堂・翠陵店をやめて運動場を加えて探検した。4班は小学校にないものを意識し、教育学部棟中庭→音楽棟→環境・情報科学館と畜舎をやめて食堂を加えて探検した。5班は大学特有の施設・設備を意識し、環境・情報科学館→翠陵店→120番教室→教養教育棟→教育学部棟に図書館を加えて探検した。6班は大学の人々の様子を意識し、環境・情報科学館をやめて教育学部棟→食堂→図書館を探検した。7班は大きさや多さを意識し、畜舎をやめて生物資源学部棟→食堂→環境・情報科学館→図書館を探検した。

各班は児童の興味・関心やリクエストや残り時間を勘案して臨機応変に計画を変更した。



楯岡は主なたんけんポイントを示す。大学広報地図をもとに作成

第1図 たんけんポイント

第3表 7つの班の大学たんけん支援計画と実施

班	たんけんポイントと活動	配慮等
1班 7人	①畜舎(5)→臭いで牛の存在を感じる ②環境・情報科学館[メープル] 1階スクリーン, 2階ソファ, 屋上(10)△ →大学生や職員にインタビュー ③教育学部棟(10)→302教室の見学 ※小学校との違い ④食堂(5)→見学	屋上では手をつなぐ。雨天は畜舎の見学をやめて屋内中心に
2班 7人	①教育学部棟(10)→数学の授業を見学 ②食堂・翠陵店(15)△→食堂や売店を見学 ※大学生の生活を感じとる ③三翠ホールと運動場(15)×→見学 ※小学校にはない大きさ, 風車の景色 ④畜舎(10)→通る +図書館, 第一体育館	雨天は三翠ホールやグラウンドによらずにメープル館
3班 7人	①教育学部棟(15)→見学 ※どんなどころで勉強しているか ②環境・情報科学館[メープル]屋上(15) →津市を見わたす ※北立誠小学校を探す ③食堂・翠陵店(20)×→見学 ※キャンパスペイで買う実演 +運動場	雨天は足下が滑りやすいので屋根のある場所にする
4班 7人	①教育学部棟中庭(10)→見学 ※小学校にないものは ②音楽棟(10)→何が聞こえるか ※教室の様子 ③環境・情報科学館[メープル]屋上(10) →学内全体を見わたす ④畜舎(10)×→牛が住む周りの自然を感じる +食堂	雨天は飼う建物の内部を見学, 滑るので注意, 畜舎は時間があれば
5班 7人	①環境・情報科学館[メープル]2階(～10) →ガラスに近づく, ソファに座る ②翠陵店△(～10)→見学(ミン, 本屋) ※キャンパスペイで買う実演 ③120番か190番教室(～5)→見学 ※大学特有の階段教室 ④教養教育棟1号館のトイレ(～5)→見学 ※広くてきれいなトイレ, トイレ休憩 ⑤教育学部棟1階・中庭(～5)→見学 ※研究室と職員室の違い +図書館	雨天はできるだけ建物内を通る
6班 6人	①教育学部棟(10)→見学 ※授業の様子を見せる ②食堂(10)→見学 ※職員の様子を見せる, 中を通る ③図書館(15)→見学 ※職員・学生と触れ合う, 貸出体験 ④環境・情報科学館[メープル]2階(15)× →見学 ※大学生の休み時間の様子	雨天の場合は環境・情報科学館をやめる
7班 6人	①生物資源学部棟(5)→見わたす ※グラウンドや風車の説明 ②食堂(3)→見学 ※小学校との違い ③環境・情報科学館[メープル]1・2階(5)△→見学 ※小学校にないスクリーン ④図書館1階2階→見学 ※大量の本, DVD, 勉強スペース ⑤畜舎(10)×→見学 ※学生が世話している	雨天の場合は階段で滑らないよう注意, 畜舎は余裕があれば

()は予定時間 △は一部行った, ×は行かなかった, +は付け加え, ※は留意点を示す。各班の大学たんけん計画などより作成

3. 大学たんけん支援による教育実践力

3.1 アンケートによる分析

大学たんけん支援を核とした生活科教育法の授業の効果を分析するために、3回の授業の前後に生活教材研究Cの受講生にとつたアンケートを活用する。アンケート項目は次のとおりである。

〈地域（児童の学び）にかかわる項目〉	
[知識：大学]	
1.	大学の施設や働く人の様子がわかる
[意欲：調査]	
2.	自分の生活する身近な地域の様子を調べたい
〈生活科（学生の学び）にかかわる項目〉	
[知識：探検]	
3.	生活科と社会科のたんけん学習の違いがわかる
[知識：教科]	
4.	生活科と低学年社会科の学習の違いがわかる
[意欲：教科]	
5.	生活科の内容と方法についての学習を深めたい
[意欲：授業]	
6.	生活科の授業を実践する力を身に付けたい
[意欲：交流]	
7.	大学の授業で児童と触れあう活動に参加したい

項目1と2は生活科の内容(3)「地域と生活」における地域の児童の学びにかかわる項目で、項目1は大学に関する知識、項目2は調査に関する意欲をみる。項目3～7は教員養成学部の学生として身に付けておきたい生活科の教育実践力にかかわる項目で、順にたんけん学習の知識、生活科と低学年社会科の知識、生活科を学ぶ意欲、生活科の授業実践力を身に付ける意欲、教育現場で児童と積極的に交流する意欲をみる。

それぞれ、a.強く(とても)思う、b.少し思う、c.あまり思わない、d.まったく思わないから選択させ、この順に4、3、2、1の数値をあてはめた。対象となる受講生⁷⁾の平均値とt-検定の結果を示したものが第4表である。アンケートの1回目と2回目で、全ての項目で平均値が高くなった。

項目1は0.1%水準の有意差($t(37) = 4.472$; $p < .001$)、項目3は0.1%水準の有意差($t(37) = 10.050$; $p < .001$)、項目4は0.1%水準の有意差($t(37) = 10.469$; $p < .001$)、項目7は1%水準の有意差($t(37) = 3.141$; $p < .01$)がみられ、学生の大学、探検、教科の知識が深まり、交流の意欲が高まった。

項目1で有意差がみられたのは、生活科の学びの視点から児童の目線で大学たんけん支援計画を立てて下見を行い、実際に大学たんけん支援を行うことにより、大学に対する理解が深まったと考えられる。項目3は授業の1時間目に社会科と生活科のたんけんの違いを考えたことや大学たんけん支援を行ってたんけんの違

第4表 授業前後のアンケート結果(2015)

	項目	指標	1回目	2回目	t-検定	
地域	1	知識	合計	90	110	-4.472
		大学	平均	2.37	2.89	$p < .001$
	2	意欲	合計	108	114	-1.233
		調査	平均	2.84	3.00	n.s.
生活科	3	知識	合計	78	131	-10.050
		探検	平均	2.05	3.45	$p < .001$
	4	知識	合計	85	135	-10.469
		教科	平均	2.24	3.55	$p < .001$
	5	意欲	合計	125	127	-0.572
		教科	平均	3.29	3.34	n.s.
	6	意欲	合計	130	136	-1.781
		授業	平均	3.42	3.58	n.s.
	7	意欲	合計	126	138	-3.141
		交流	平均	3.32	3.63	$p < .01$

3回とまとめの授業に出席した38名を対象。筆者作成

いを実感できたからと推察される。項目4は大学たんけん支援後の3時間目の授業で、生活科の変遷から社会科にかかわる単元は町たんけんのみとなったことを捉え、低学年社会科と生活科に共通する郵便・乗物の単元の違いとそれぞれのよさを考えたためと推察される。項目7は大学たんけん支援で直接児童と触れ合っただけで好奇心を目の当たりにし、発達段階に応じた指導が必要であると感じたためと考えられる。

項目2は大学たんけん支援では自らが大学周辺を調査する意識が働かず、項目5と6は受講生の意識が初めから高く有意差がみられなかったと考えられる。

アンケート調査から、大学たんけん支援を核とした授業は、受講生の教育実践力が高めることに対して一定の有効性があることがわかる。

3.2 ワークシート記述による分析

アンケートの分析では項目5と6について、統計学上の有意差がみられなかった。そこで、授業で毎回学生が記入している学びの振り返りシートの記述と生活教材研究Cの最終回のまとめの授業でとつたワークシートの記述について、アンケートの項目1に関連する大学の様子の知識、項目3に関連する生活科のたんけん学習の知識、項目5に関連する生活科の内容や方法を改善する意欲、項目7に関連する児童の様子、主に項目6に関連し、項目3と5と7にも関連する授業実践力にかかわる意欲をみる。

第5表は学びの振り返りの記述の変化の分析、第6表は一定期間をおいて、生活教材研究Cにおけるたんけん支援を核とした3回の授業で学んだことや実践で必要であると感じたことの記述の分析を示している。

第5表 大学たんけん支援前後の学びの記述の変化

No.	班	学びを振り返って(どうためになったのか) 6/3(1時間目後)					学びを振り返って(どうためになったのか) 6/10(2時間目後)				
		大学	探検	生活	児童	実践	大学	探検	生活	児童	実践
1	3		○						○	○	
2	4		○		○					◎	
3	5		○		○				○	◎	
4	6		○		○				○	○	
5	7		○								
6	1		○						○	◎	
7	3		○							◎	
8	4		○						○	◎	
9	5	○			○						
10	6		○						○	◎	
11	7		○						○	○	
12	1		○						○	○	
13	2		○								
14	3	○							○		
15	4		○		○				○	○	
16	5		○							○	
17	1		○						○		
18	2		○		○					◎	
19	4		○						○	◎	
20	5		○						○	○	
21	6		○		○					◎	
22	7		○		○				○	○	
23	1		○		○					○	
24	2	○	○							◎	
25	3		○						○	○	
26	4		○		○				○	◎	
27	6		○		○					○	
28	7		○		○				○	○	
29	1		○							○	
30	2		○		○				○	○	
31	4		○		○					◎	
32	5		○		○				○	◎	
33	6	○			○					○	
34	7		○		○				○	○	
35	1		○		○				○	○	
36	3		○								
37	4		○							◎	
38	5	○			○					◎	
		合計					合計				
		8	27	1	11	11	0	3	6	30	25

38名の受講生を対象。文意が変わらない範囲で記述を省略した。項目の大学は大学の様子の知識、探検は生活科のたんけんの知識、生活は生活科の授業の改善の意欲、児童は児童の様子、実践は授業実践力(◎は具体的記述)の意欲、二重下線は各項目に該当する部分を示す。筆者作成

第6表 大学たんけん支援を核とした3回の授業における学び

	順	3回の授業で学んだことや実践で必要であると感じたこと 8/5(一定期間をおいた生活教材研究Cの最終回の授業)	大 学	探 検	生 活	児 童	実 践
1	3	子ども達がどのような着眼点をもっているか、どのような学びを欲しているかを知り、教師としてどのような学びを提示すべきかを熟考する必要性を学んだ。				○	◎
2	4	生活科の探検では、場所や人に親しみ、愛着を持って接することを重視すべきことを学んだ。子どもたちの学びを深めるためには教師の働きかけが大切である。		○			◎
3	5	児童の目線になって、どんなところに興味を持つのか、それをどのように伸ばしていくのかを学んだ。自分たちの住む社会の仕組みを学ぶことも大切である。		○		○	○
4	6	大学探検のコースを考えることで安全面を確保することの大切さ、探検して自分たちの計画の甘さを感じ、準備・計画の大切さを学んだ。					◎
5	7	生活科は地域に興味を持たせることを重視していることを学んだ。実際に探検して、自分の感情に素直で次から次に興味の対象が変わることを学んだ。好奇心を大切に、やるべきことは伝えることが必要である。		○		○	◎
6	1	探検では想定外の行動をとる可能性があるために、その場での素早い対応や幅広い準備が必要であることを学んだ。生活科ではできるようにすることが重視されることを学んだ。		○		○	◎
7	3	子ども達と触れ合い、あたりまえの何でも無いことに興味を示すことに気づいた。子ども達は不思議なことであられた社会の中で疑問をもつ。それに問いを投げかけ、考えさせ意見を引き出すことが大切である。				○	◎
8	4	生活科としての体験や学びの意味をもたせる必要がある。探検から子どもによりそうことが必要である。		○	○		
9	5	子ども達と触れ合い、自分たちは全く違う考え、動きをすることをひしひしと感じた。教材を調べておくことも大事であるが、児童をしっかり見つめ、臨機応変に動ける力が必要であることに気づいた。				○	◎
10	6	生活科の探検は生きていく力を身に付けることができるようにすることを学んだ。探検をして、私たちが気づかないところに気づいたり、興味を持ったりすることを学んだ。子どもの立場になることも大切である。		○		○	○
11	7	生活科と社会科では同じ探検でも目的も学びも異なり、生活科の探検として子ども達が喜ぶことや興味を持つことは何かを考えて計画することが最も重要である。生活科は基礎の部分に担う重要な教科である。					◎
12	1	下見をして、子ども達が楽しんでもらうことが大切だと思う。探検して、自分たちと子ども達のペースは違った。ルールをつくとしっかり守ることができる。子ども達の安全を守ることを一番に考えなければならない。		○		○	○
13	2	生活科ならではの楽しみを味合わせる大切である。校区探検で気づかなければならないことはたくさんある。		○			
14	3	探検をして、自分にとっては小さなことでも小学生にとっては大きなことで驚いた。驚きを得るような機会を増やすことがどれだけ小さいことでも必要である。				○	◎
15	4	同じ校区探検でも生活科と社会科ではねらいが異なる。探検では、子ども達の興味の示し方に驚くこともあった。探検では何に気付き何を学べるかを意識して計画する必要がある。				○	◎
16	5	現役教師の方々の力量に驚かされた。具体的な指示はもちろん、情報を与えるタイミングや伝え方でも子どもの興味を引くことができることを学んだ。					◎
17	1	児童はそれぞれ興味を持つ対象が異なり、探検に対する態度の違いがみられた(羊そのものに関心をもつ子もいれば餌に興味を持つ子もいる)。児童の行動パターンを幾つか予想しておく必要がある。				○	◎
18	2	生活科は地域との関わりで重点をおいていることを学んだ。児童の目線に立って、どのレベルまでならできののかを考え、安全な授業のために下見や授業に工夫が大切であることを学んだ。		○			◎
19	4	生活科は子どもの活動の場を広げることが重要で、生きていく上で必要になる知識や技能を身に付けさせるような実践や活動が必要となる。		○			◎
20	5	子ども達のしそうなことを考えて作ったプランであったが、本番は計画通りに行かなかった。子ども達の興味関心は生き物のようだ。先生方のように臨機応変な対応が必要である。				○	◎
21	6	施設や設備だけでなく、人のかかわりをつくることで親しみや愛着が持てるような工夫や子ども達の生活に関わる実践的な力を身に付けさせることを学んだ。		○			
22	7	教科書の比較、探検の引率を通して、探検で学べる内容が社会科と生活科では明確に違い、生活科では地域とのつながりを学ばせることが大切であることを学んだ。		○			
23	1	さまざまなものに興味関心をもち、自ら学習しようとする姿勢が伝わってきた。児童のなぜという気持ちを尊重することでよい教材ができるだろう。児童の声には常に耳を傾けるようにしなければならない。			○	○	◎
24	2	生活科の探検では、場所と人との関わりを感じることに重点をおいている。計画を考える中で、様々なところに目を向ける。何気ないものが教材になることを感じた。より役立つように生活科の変遷について学んだ。		○			◎
25	3	生活科と社会科の違いについて学ぶことができた。生活科の校区探検では、その場所で見られないものに触れ合う必要があると考えた。					◎
26	4	子どもの目線で、安全や時間の確認をすること、臨機応変に予測のできないことに対応していくことが必要である。社会科とは視点が異なり、生活科では「気づかせる」ではなく「できるようにする」。		○			◎
27	6	たんけんコースを考える際に普段自分たちが見ている視点とは違う。子どもの目線に立って、見せたいものや知ってほしいものを考えることができた。生きていく上での実践や活動が必要である。			○		○
28	7	一緒に大学探検を行って、子ども達の実際の行動や反応は異なり、大学生と子ども達とは着眼点や見方の違いがあることに気づきました。そういった違いを考慮した上で、活動内容を考えなければならぬ。			○	○	
29	1	校区探検を子ども達と一緒に行って、子ども達の好奇心が強く、児童たちをまとめるのがいかに難しいかを学んだ。このような探検から身の回りの自然(普段気づけなかった)を学ぶことができた。	○			○	
30	2	生活科と社会科の目的の違いを知ることができた。小学生と探検してみ、私たちが疑問に思わないことを質問してきて好奇心が旺盛だった。好奇心に答えられるような授業展開が必要になってくると思った。				○	◎
31	4	生活科は人のかかわりが大切であることを学ぶことができた。子ども達と三重内を探検して、子どもの視点を捉えることができた。安全面にも気をつける必要がある。		○		○	○
32	5	校区探検では自分と地域とのかかわりを実感でき、子ども自身が存在感を確認する体験が大切であり、発見や気付きという子どもの感覚を刺激する必要がある。事前事後の学習が体験の意義をきめる。			○		◎
33	6	子ども達と触れあって、「気付き」の豊富さに驚いた。気付きを限定しないようにしなければならないし、歩くペースやメモをとるのに個人差があるので時間に余裕を持たせたりする工夫が必要である。				○	◎
34	7	子ども達が特徴ある建物などに興味を持つと考え計画したが、意外にも道ばたに落ちているものや花などの植物や虫にも興味を示した。さまざまなものに興味を持つことを考慮して授業を作るべきだと思った。			○	○	
35	1	子ども達が学びたいと思う気持ちをどれだけ授業に反映させるか、子どもの興味を見落とさないこと、上手に拾うことが大切である。					◎
36	3	児童と大学探検をして、児童は大学生とは異なる視点を持ち、興味を引くものが違うためコース内で満足する、しないがあった。児童の興味をあらかじめ考えて時間に余裕を持つことが必要である。				○	◎
37	4	児童が地域社会で生活するためのスタート地点として、探検の単元の重要性を学んだ。実際に探検して、児童の気付きをより引き出すためには問いかけをすることが大事であることを学んだ。		○			◎
38	5	社会科と生活科の違いを把握した上で探検活動を行う重要性を知った。子ども達の興味関心が強くそこからの学びに繋げるようにしたい。子ども自身の気付きから教師が付け加えることでより楽しく学べるのだと思う。			○		◎
合計			1	18	7	20	31

38名の受講生を対象。文意が変わらない範囲で記述を省略した。項目の大学は大学の様子の知識、探検は生活科のたんけんの知識、生活は生活科の授業の改善の意欲、児童は児童の様子、実践は授業実践力(◎は具体的記述)の意欲、二重下線は各項目に該当する部分を示す。筆者作成

第5表の大学たんけん支援前後の学びの記述の変化について、1時間目の授業後の学びを振り返っての記述は、大学の様子の知識が6、たんけんの知識が27、生活科の授業を改善する意欲が1、児童の様子が11、授業実践力が11となっている。1時間目の授業で第2学年生活科と第3学年社会科の校区たんけんの違いを考えたことからたんけんの知識に関連する記述が多くなっている。また、児童の目線を意識してたんけん支援計画を立て、実際に下見をしたことから、「事故や怪我がないように」「興味を伸ばしていく」「時間配分」「親しみがもてるようにしたい」などの授業実践力にかかわる記述がみられた。

2時間目の授業後の学びを振り返っての記述は、大学の様子の知識が0、たんけんの知識が3、生活科の授業を改善する意欲が6、児童の様子が30、授業実践力が25となっている。1時間目に比べて圧倒的に児童の様子や授業実践力にかかわる記述が増えている。これは2時間目の授業で大学たんけん支援計画にそって実際に北立誠小学校の児童と大学を巡り、「児童が大学生にはない視点をもっている」「大学生では見過ごしてしまうようなことに興味・関心を持つ」「見て欲しい場所から次の目的地に向かう途中でも、バッタがいるなど常に様々な方向に興味を持っている」「児童の興味を大切にしながら探検が進められたらよい」など、自分たちの計画したルートの中で、児童の興味・関心が自分たちの予想と異なる場合があることや、自分たちにとっては気にもとめないことに児童がこだわることに気付くことや、児童の行動に対してどのように対応すればよいのかを考えることができたためである。

特に授業実践力にかかわる具体的な記述が1時間目と比べて急増したのは、実際に児童とコミュニケーションをとり、たくさんの疑問に答えたり、気付きを促したり、希望を聞くことで、発達段階にそった臨機応変に対応することの必要性を自覚し、北立誠小学校の引率の先生方の的確な指示や気付きの促しを目の当たりにしたためと考えられる。また、たんけん支援後に、たんけん支援で気をつけていたことや生活科のたんけんでためになったことを振り返ることで、児童が大学の場所や人々の様子を捉えるための工夫について改めて確認することができたためと考えられる。

生活科の内容や方法を改善する意欲についても数は少ないがみられるようになった。これは授業実践力とも連動しており、実際にたんけん支援を行って、たんけん学習はどのような内容や方法による改善が望ましいかを考えるようになったためと推察される。

ワークシート記述の分析から、項目5と6に関連した意欲の高まりの記述がみられることから、たんけん支援計画を立て、実際にたんけん支援を行うことで、受講生の教育実践力を高めることができるといえる。

第6表の一定期間をおいた大学たんけん支援を核とした3回の授業での学びについて、3回の授業で学んだことや実践が必要であると感じたことの記述は、大学の様子の知識が1、たんけんの知識が16、生活科の授業を改善する意欲が7、児童の様子が20、授業実践力が31となっている。第5表の大学たんけん支援後の学びの記述と比較すると、授業実践力の具体的な記述がさらに増え、3回の授業の中で特に大学たんけん支援の活動による学びについて意識していることがわかる。「子どもたちの学びを深めるためには教師の働きかけが必要である」「具体的な指示や情報を与えるタイミングや伝え方で子どもの興味を引くことができる」「児童の目線に立ってどのレベルまでならできるのかを考える」「児童の行動パターンを予想しておく」「子ども達の好奇心にそれに答えられるような授業展開が必要」「驚きを得るような機会を増やすことが必要」「学びたいという気持ちをどれだけ授業に反映させるか」「気付きをより引き出すための問いかけが必要」などの態度や能力にかかわる記述がみられた。

児童の様子については、「自分の感情に素直で次から次へと興味の対象が変わる」「子ども達の興味関心は生き物のようだ」などより考察が深まっている。また、「児童のなぜという気持ちを尊重した教材づくり」「子どもの着眼点の違いを考慮した教科内容の考察」「体験の事前事後の指導の大切さ」など生活科の内容や方法を改善し、今後に生かそうとする記述が増えた。

一定期間をおいた学びの振り返りにおいても教育実践力に関連する気付きが深まることから、大学たんけん支援を核とした授業は有効性があるといえる。

4. 大学たんけん支援による児童の学び

4.1 客観式アンケートによる分析

大学たんけんという三重大と小学校が連携した活動において、交流した児童が生活科のたんけん学習としての学びが保障されたのかをみていく。大学たんけん支援後に北立誠小学校に帰ってすぐに、各担任の先生に児童の学習の振り返りとしてアンケートをとってもらった。客観式アンケート項目では、それぞれについて、a.強く(とても)思う、b.少し思う、c.あまり思わない、d.まったく思わないから選択させ、この順に4, 3, 2, 1の数値をあてはめた。第7表はアンケートの項目とその結果を示したものである⁸⁾。

項目1は今回のたんけんの対象である三重大の様子について、項目2は三重大への探究意欲について、項目3は三重大への親しみ、項目4は三重大と自分とのかかわり、項目5は受講生を中心とした三重大の人とのかかわり、項目6は三重大のたんけんへの受講生と児童のチームでの学習態度をみる。

第7表 三重大学たんけんのアンケート結果(2015)

アンケート項目	平均
1. 三重大学のようにがよくわかった [たんけん対象の様子]	3.82
2. 三重大学のことをもっと知りたくなった [たんけん対象への探究意欲]	3.82
3. 三重大学が好きになった [たんけん対象への親しみ]	3.87
4. 自分と三重大学とのつながりを見つけた [たんけん対象とのかかわり]	3.47
5. 三重大学の人(大学生や働く人)と仲よくなれた [人とかかわり]	3.71
6. 大学生のお兄さんお姉さんといっしょに楽しく さんかできた [学習態度]	3.84

79名の児童を対象。筆者作成

全ての項目において平均点が高く、項目1の三重大学のようにわかる、項目2の三重大学をもっと知りたい、項目3の三重大学が好きになった、項目5の三重大学の人と仲よくなれたの数値が高いことから、生活科の内容(3)「地域と生活」の「自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみを持ち、人々と適切に接する」というねらいが達成できている。項目6で受講生と児童のチームで楽しくたんけんに参加できたという結果は、生活科教育法における受講生による大学たんけん支援の有効性を明確に表している。平均が一番低かった項目4の三重大学とのつながりについては、1回の大学たんけんの活動のみでは意識することが難しいことを示している⁹⁾。

4. 2 記述式アンケートによる分析

第8表は三重大学のたんけんで児童が行ったと回答した場所を班ごとにまとめたものである。

第8表 三重大学たんけんで行ったところ(2015)

班	たんけんで思い出せるもの
1 (13)	羊13, 教室8, コイ7, 食堂3, 第一体育館2
2 (12)	羊9, 図書館6, コイ5, 第一体育館4, 食堂3
3 (11)	メープル(屋上)11, 運動場10, 教室9
4 (12)	食堂8, 中庭7, メープル(屋上)7, 音楽棟7, コイ3
5 (10)	図書館9, メープル8, 120番教室7, コイ2
6 (11)	図書館9, 食堂8, 教育棟2
7 (10)	図書館10, 食堂8, 生物資源学部6

79名の児童を対象、()は班の児童の人数。複数回答。筆者作成

第3表と比較すると、受講生と児童のチームで巡ったたんけんポイントを的確に捉えていることがわかる。中でも、小学校では見られない動物や大学の施設について心に残ったものとして挙げている。また、受講生が児童の興味・関心に応じてたんけんルートを変更したり、畜舎には牛ではなく羊がいたことがわかる。

第9表は三重大学たんけんの感想を8つの視点から分析したものである。たんけんの楽しさや面白さの記述が最も多い。次に、再び大学たんけんをしたい、三重大学に行きたい、三重大学が好きであるなどの親しみや愛着の記述が多い。受講生のお兄さんお姉さんから大学について色々教わったことや大学の施設・設備への気付きの記述も多い。

施設・設備の存在と大学への気付きの記述として「とても面白いところと思いました。食堂で金を払うことを知りませんでした。色々な本があってすごかったです」、生き物の存在の記述として「教室や自転車がいっぱいあってコイもいたので楽しかったです」、お兄さんお姉さんと仲良くなり、教わったりして大学に再訪したいという記述として「お兄さんお姉さんと仲良くなりました。色々なところを分かりやすく案内してもらえました。三重大学をもっと知りたいです」、たんけんが楽しく大学に再訪したいという記述として「三重大学はとても面白かった。探検があったらもう一度行きたいです。大好きです」などがあつた。

児童の住む地域に存在する公共施設としての三重大学を受講生と一緒にたんけんすることで、児童は大学の施設・設備・人に着目し、大学への興味・関心を高め、親しみをもつなど生活科のたんけん学習のねらいが達成されていることがわかる。

第9表 三重大学たんけんの感想(2015)

内 容	人数
○ 施設・設備の存在 [地域の場所]	17
○ 生き物の存在 [地域の場所]	4
○ 大学全体の感想や気付き [地域の場所]	9
○ お兄さんお姉さんの優しさや親切さ [地域の人々]	11
○ お兄さんお姉さんと話して仲良くなった [地域の人々]	16
○ お兄さんお姉さんに教わった [地域の人々]	22
○ 大学に再訪・進学 [親しみ・愛着]	24
○ 学習の評価 [楽しさや面白さ]	42

79名の児童を対象、複数回答。筆者作成

5. 成果と課題

本研究では、生活科の教科教育法である生活教材研究Cにおける大学たんけん支援を核とした3回の授業は、受講生の教育実践力が高まることを明らかにし、有効性があることを示した。受講生は児童との交流により様々な発見ができた。また、生活科で育った学力の調査では低調であった町たんけんについて、受講生が大学たんけん支援を行うことにより、心に残る活動となり、大学の施設・設備や人に関心をもつことができた。生活科のたんけん学習としても有効性がある。

井深(2018, pp. 26-30)は、「生活科で大切にしてきた気付きについては、教師の指導力が問われてきた事項である」とし、学習指導要領の気付きに関する記述の変遷から生活科の気付きと気付きの質が高まりについて整理している¹⁰⁾。菱田・野田(2011, p. 93)は、気付きの質の高まりの構造を示し、無自覚な気付きから自覚された気付きになるために活動中の教師の言葉かけなど、個別的な気付きからつながりをもった気付きになるために伝え合い・話し合い活動など、対象への気付きから自分自身への気付きとなるために活動を振り返って表現する学習活動など、気付きの各段階における手立てを示している。大学たんけん支援を核とした3回の授業では、受講生の児童への言葉かけにより無自覚な気付きから自覚された気付きに高めることができたことが成果の1つといえる。

受講生の教育実践力をより高めるために、児童がつながりをもった気付き、自分自身への気付きへと高まる手立てが必要である。大学たんけん支援後に、小学校と連携した授業を位置づけることが考えられる。

【註】

- 1) 生活科の教科教育法である生活教材研究は、2年次に学籍番号で4つのクラスに振り分けられ、C・Dが前期、A・Bが後期に開講されている。生活教材研究Cは5人の教員によるオムニバス方式で、社会科教員に3時間が割り当てられている。
- 2) 三重大学教育学部と隣接学校園である一身田・橋北校区との連携活動の一環として、北立誠小学校から三重大学教育学部への大学たんけん支援の依頼を受けて、2011年度から継続している。北立誠小学校から三重大学までは徒歩で8分程度である。
- 3) 永田(2018, p. 55)は、教室における一斉授業を想定して授業実践力と定義した。本研究では児童との交流によるたんけん支援であり、コミュニケーション力や対応力も重視した教育実践力と表現した。
- 4) 北立誠小学校の第2学年は3クラスあり、それぞれ7グループで構成されていたため、各クラスの1～7のそれぞれのグループを1つにまとめ、生活教

材研究Cの受講生47名を7つの班に分けた。

- 5) 実際の大学たんけん支援の時間は50分であることを提示し、大学生が20分で回れるルートが児童には50分かかるイメージをもたせた。
- 6) 低学年社会科の最後となる昭和52年版学習指導要領と生活科が誕生した平成元年版学習指導要領とそれぞれに対応する教科書記述を比較した。
- 7) 受講生の内、3回の授業に出席し、アンケートの1回目(2015年6月3日)と2回目(2015年6月17日)に回答し、まとめの授業(2015年8月5日)のワークシートを記述した38名を対象とした。
- 8) 大学たんけんに参加した児童の内、確実に自分の班や体験場所を記述している79名を対象とした。
- 9) 質問の意味がわからず無回答の児童もいた。
- 10) 生活科でいう気付きとは、知的な側面だけではなく、情意的な側面も含まれ、確かな認識へとつながるものであること、気付きの質が高まったとは、無自覚だった気付きが自覚化され、個別の知識が分類及び関連付けられ、対象のみならず自分自身の気付きが生まれることなどをまとめている。

【参考文献】

- 井深智子「『気付き』と学習指導」須本良夫編『生活科で子どもは何を学ぶかーキーワードはカリキュラム・マネジメント』東洋館出版社, 2018, pp. 26-36
- 神永典郎「生活科の継承と刷新ー自立し生活を豊かにしていく, よき生活者の育成を目指してー」『せいかつか&そうごう』第25号, 2018, pp. 8-17
- 佐藤孔美「初等生活科教育の実践③ー地域と生活ー」片平克弘・唐木清志編『初等生活科教育』ミネルヴァ書房, 2018, pp. 85-96
- 永田成文「授業実践力を高める教育実習を基盤とした教職実践演習ー協働的な学びによる授業の改善と実践を通してー」『三重大学高等教育研究』第24号, 2018, pp. 55-64
- 野田敦敬ほか「生活科で育った学力についての調査研究」『せいかつか&そうごう』第12号, 2005, pp. 100-109
- 野田敦敬ほか「生活科で育った学力についての調査研究(2013)」『せいかつか&そうごう』第22号, 2015, pp. 32-43
- 菱田尚子・野田敦敬「気付きの質を高める指導に関する研究」『せいかつか&そうごう』第18号, 2011, pp. 88-95
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』日本文教出版, 2008
- 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説生活編』東洋館出版社, 2017
- 文部省『小学校指導書生活編』教育出版, 1989